

【論文】

辛亥革命勃発前後の山田純三郎の行動と人脈 ～孫文支援者となるまでの時期を中心に～

愛知大学東亜同文書院大学記念センター学外研究員 武井 義和

はじめに

本論は、これまで筆者が扱ってきた山田純三郎を題材に、彼が孫文支援者となる直前の時期、具体的にいえば1911年11月の辛亥革命における行動を取り上げるとともに、行動の過程で純三郎と関係があった人々に注目し、純三郎をめぐる革命人脈を浮き彫りにする。

山田純三郎(1876～1960年)は、孫文が清朝打倒を目指して指揮した惠州蜂起に加わり、戦死した山田良政(1868～1900年)の弟である。1911年12月に孫文が欧米から帰国すると、彼の支援者となり中国の革命に深く関わっていくが、それ以前の純三郎の状況については、資料の制約により詳細が分からない。したがって、本論はこうした空白域を埋めるべく、冒頭に挙げた問題意識に則り考察を進めるものである。

なお、本論は資料が乏しい時期を扱うため、推察の域を出ない部分が多く、試論的なものとならざるを得ないことを予めお断り申し上げておく。

1. 辛亥革命までの山田純三郎の主な経歴

孫文が記した『建国方略』のなかで、山田純三郎は革命のために奔走し終始怠らなかつた日本人の一人として、良政とともに

名が挙げられている¹。戦後まで長生きしたが、ここでは辛亥革命勃発までの主な経歴を取り上げる。

1876年に津軽藩士・山田浩蔵の三男として弘前に誕生した純三郎は、東奥義塾を経て、良政の勧めにより1900年南京同文書院の学生として入学した。南京同文書院は、1898年に貴族院議長の近衛篤磨を会長として誕生した東亜同文会が日清友好の実現を目指して、1900年に南京に開設された日本の学校である²。なお、良政はこの南京同文書院の開設準備にあたり、また教授を務めていた。同年夏、義和団事件の影響などもあり、南京同文書院は上海へ移転し翌1901年より「東亜同文書院」と名を変え、再出発することになった。良政は上海へ移転する頃に辞職して孫文の革命活動に本格的に加わり、1900年秋の惠州蜂起で戦死した。中国の革命で犠牲となった最初の外国人といわれる³。

一方、純三郎は兄のように革命に関わる

¹ 孫文『建国方略 心理建設』（『総理全集』第一集下冊、胡漢民編、上海民智書局、1930年）527頁。なお、ほかに名が挙げられている日本人は、宮崎滔天兄弟、山田兄弟のいとこの菊池良一、萱野長知などである。

² 南京同文書院設立の目的および詳しい経緯については、『東亜同文書院大学史』（滬友会編、1982年）76～79頁を参照。

³ 前掲『建国方略 心理建設』528～529頁。

ことはなく、上海の東亜同文書院で事務員兼助教授として勤務した。1904年に日露戦争が勃発すると、陸軍通訳官として出征し、戦争終結後の1906年1月に日本へ帰国した。1年後の1907年1月に再び東亜同文書院へ復帰し、教授となったが、同年春に辞職し南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄）に就職した。その後、1910年5月撫順炭の販路拡大のため上海に派遣され、三井上海支店内に勤務することとなった。そして1911年の辛亥革命勃発を迎えることとなる⁴。

こうしてみると、純三郎は教育関係者や会社員として過ごしていたことが分かる。また、1906年を除いて基本的に中国にいたが、以上の経歴からは、孫文の支援者として活動したり革命に関与した様子が浮かび上がらない。これらのことが、辛亥革命勃発後に純三郎が革命の表舞台に突然登場したとの印象を与えている。

2. 辛亥革命勃発後の山田純三郎の行動

山田純三郎が革命の表舞台に登場した象徴的な出来事が、1911年12月21日に欧米より帰国した孫文を、宮崎滔天らとともに香港で出迎えたことである。その時に撮影された2枚の写真がある。

しかし、純三郎の動向を詳しくみると、その時よりも前に辛亥革命に関与していたことが2つ確認できる。1つは、1911年11月3日から4日にかけて革命家の陳其美が実行した、清朝側の兵器製造工場である江



【上】山田純三郎（左）と孫文
【下】孫文を囲んでの集合写真。前列左より2人目純三郎、4人目孫文、6人目何天炯、後列左より6人目宮崎滔天
（いずれも愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵）

南機器局（または江南製造局）への攻撃に際し、ピストルを提供したことである。純三郎の回想によれば、陳其美からピストル一丁の借用を依頼されたが、当てがなかったため、日本総領事館の有吉明総領事に交渉してピストル三丁を借り、江南機器局に入っていったという⁵。なお、攻撃開始の前

⁴ 山田良政および純三郎の経歴は結束博治『醇なる日本人』（プレジデント社、1992年）、純三郎履歴書などに拠った。なお、結束氏は純三郎の上海赴任を1909年と記しているが、純三郎は1910年としている。

⁵ 「革命夜話」（愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵）。江南機器局は1865年に李鴻章により官営の兵器製造工場として設立された（『上海史』唐振常主編、沈恒春副主編、上海人民出版社、1989年、257頁）。陳其美による江南機器局への攻撃および占領

日である11月2日に、純三郎は攻撃のことを藤瀬政次郎三井上海支店長に話しているが⁶、これは陳がピストル借用依頼をした際に、純三郎に直接告げたものと考えられる。ここでは、陳其美と純三郎がいつ、どこで出会ったのかについては不明であるものの、純三郎は孫文支援者として登場する以前に、すでに革命家とつながりがあったことが分かる。

もう1つは、1911年11月下旬、漢陽で戦う革命家の黄興を訪問しようとする宮崎滔天一行と行動をとともにしたことである。宮崎は伊東知也、志村光治、何天炯とともに上海から船で長江を遡って漢陽へ向かおうとしていたが、漢陽が陥落し黄興が日本の船に乗り込んだという情報を入手した純三郎が、山本安夫とともに汽車で宮崎を上海から鎮江まで追いかけたのである。その後、純三郎は南京の戦況を確認しに行き、帰りに黄興や萱野長知とともに、日清汽船の船で鎮江に滞在する宮崎滔天一行と合流し、上海へ向かった⁷。

については、莫永明『陳其美伝』（上海社会科学院出版社、1985年）59～66頁、片倉芳和「陳其美」（『上海人物誌』日本上海史研究会編、東方書店、1997年）113～114頁を参照。

⁶ 前掲「革命夜話」。

⁷ 同上、および『宮崎滔天全集』第5巻（宮崎龍介・小野川秀美編、平凡社、1971年）532～534頁。なお、山本安夫（1878～1928年）は孫文や黄興らと親交を結んだとされるが、日露戦争時に旧満洲へ渡って以来、中国に関係した人物である。晩年は革新倶楽部、民政党などの政党結成に尽力した（『対支回顧録（下巻）』東亜同文会編、ただし復刻版、原書房、1968年、「山本安夫君」の項）。山本は辛亥革命以前の1910年時点で宮崎滔天と関わりがあった（宮崎龍介・小野川秀美編、平凡社、1973年、198～199頁）。

ここでは、純三郎は宮崎滔天をはじめ、黄興や何天炯、さらには萱野長知など、後に孫文支援の活動を展開するなかで密接に関わっていく人々と接点があった様子が浮かび上がる。純三郎はこの段階では、後に触れるように孫文と直接的な関係を持っていなかったが、孫文支援者として活動していくための人脈が形作られたと捉えることができる。

3. 山田純三郎の革命人脈

山田純三郎が孫文支援者となった背景として、1900年に惠州蜂起で戦死した良政の遺志を継承しようとしたことが挙げられる⁸。しかし、それは精神面、思想面のことであり、実際に革命に参加し行動しようとするれば、人脈がなければ不可能である。先に陳其美と純三郎との関係を挙げたが、こうした人脈の可能性について、日露戦争終後に日本へ帰国した時期の純三郎を中心に検討を進める。

①山田純三郎の動静

すでに記したように、山田純三郎は1906

⁸ 佐藤慎一郎『佐藤慎一郎選集』（佐藤慎一郎選集刊行会、1994年）31頁、保阪正康『孫文の辛亥革命を助けた日本人』（筑摩書房、2009年）213頁。また、佐藤慎一郎は純三郎が赴任した上海で石炭売買をめぐる不正や賄賂の実態を目の当たりにしたことから、こうした商売はやらないとあって中国革命に情熱を捧げるようになったと記している（佐藤慎一郎『近代中国革命史に見る酷烈とさわやかさの中国学』大湊書房、1985年、158～159頁）。ここからは、純三郎が革命を商売に相対する崇高な理念として位置付け、それに向かっていこうとした様子がうかがえる。しかし、単に商売の実態を知っただけではなく、やはり良政の犠牲という問題が純三郎の意識の根底にあったと考えるのが妥当であろう。

年1月に日本へ帰国し、翌年東亜同文書院に復帰するまでの1年間を日本国内で生活した。

この時期、彼は何をしていたのか。それについて2つだけ確認できる。いずれも東京にある東亜同文会に関係するものである。1つは、7月9日に鍋島直大東亜同文会副会長邸で開催された、東亜同文書院卒業生の蒙古視察談を聴く会に津軽英麿らとともに出席していることである⁹。もう1つは、11月中旬より12月初旬にかけて、東亜同文会から各府県に派遣された5名の委員の一人を務めたことである。この委員が担った任務は、東亜同文会が経営する東亜同文書院の学費値上げについて了解を得るため、各府県の長官や県会議長などを訪問して陳情することや、書院の現状および卒業生の将来、清国の大勢などについて談話することなどであった¹⁰。

ところで、この当時の東京は中国の革命を考える上でも重要な位置を占める。1905年には中国同盟会が結成され、孫文や何天炯、黄興、陳其美、宋教仁などの革命家が存在していたからである。そして、彼らを支援した宮崎滔天や萱野長知などもいた。見方を変えると、純三郎は中国の革命の海外拠点となり、中国人革命家や日本人支援者が集う同じ都市空間にいたことになる。

ただ、純三郎が1906年の東京で彼らと出会う機会があったかどうかについては、資料から浮かび上がってこない。しかし、後

の純三郎の革命人脈を考える上でのキーパーソンが浮かび上がる。それが宮崎滔天である。

②山田純三郎と宮崎滔天

宮崎滔天は1897年に孫文と出会って以降、彼の支援者として活動し、中国同盟会結成にも関与した。また、宮崎自身が編集人として1906年9月から翌年3月にかけて発行した『革命評論』の事務所には、既述の何天炯や黄興、宋教仁、そして孫文などが出入りしていた¹¹。もっとも、孫文は1906年においては4月から7月までと10月以降に日本に滞在していたが、主な居住地は横浜であり、東京と横浜との間を往来していた¹²。いずれにせよ、宮崎滔天はこの段階ですでに、革命家と幅広い関係を築いていた。

この宮崎滔天と純三郎は辛亥革命勃発直後から関わりがあったことが見出せる。例えば2. で触れたように、1911年11月下旬に純三郎は宮崎滔天らと行動をとともにしたほか、その前後の頃と思われるが、上海の純三郎の家に宮崎が滞在している¹³。そして、1911年12月に欧米から帰国した孫文と一緒に香港まで出迎えに行っている。

¹¹ 宮崎滔天に関する著作は多いが、ここでは上村希美雄『宮崎兄弟伝 アジア篇中』（葦書房、1996年）、榎本泰子『宮崎滔天』（ミネルヴァ書房、2013年）を参照した。また、前掲『宮崎滔天全集』第5巻に所収の年譜では、1906年に宮崎滔天と何天炯、黄興、宋教仁、孫文らとの交流があったことが確認できる。

¹² 安東強『孫中山史事編年』第2巻（桑兵主編、関曉紅・呉義勇副主編、中華書局、2017年）490、501、514、520頁。

¹³ 前掲『宮崎滔天全集』第5巻、102頁。

⁹ 『東亜同文会報告』第80回（東亜同文会編、ただし復刻版、藤田佳久監修・解説、高木宏治編集、ゆまに書房、2012年）74頁。

¹⁰ 『東亜同文会報告』第85回（東亜同文会編、ただし復刻版、藤田佳久監修・解説、高木宏治編集、ゆまに書房、2012年）405頁。

こうした関係性から、両者は辛亥革命以前から接点があったのではないかと推察される。その手掛かりとなるのは、『革命評論』の発送原簿である。そのなかの「寄贈並ニ交換ノ部」に、純三郎の名前が「牛込区北山伏町三十八佐藤方」という住所とともに記載されているのである¹⁴。『革命評論』の発行時期と純三郎の帰国時期がちょうど重なる。

もっとも、これだけではどれほどの交流があったのか不明である。ただ、『革命評論』第9号(1907年2月)の1頁目には山田良政の肖像が掲載され、そして6頁目では戊戌政変で良政が清朝改革派を救出したことをはじめ、生い立ちから惠州蜂起に参加するまでが詳細に記載されている¹⁵。この点を踏まえると、編集人の宮崎滔天にとって、良政は印象深い人物であったと思われる。事実、彼が書いた「亡友録」で良政も挙げられているが、良政とは一度しか会わなかった旨記している¹⁶。ここから、宮崎滔天にとって良政は後々まで記憶に残った人物であった様子が分かる。こうしてみると、交流の親密さは別として、純三郎と宮崎滔天は接点があった様子が浮かび上がるとともに、接点の契機の1つとして、純三郎の兄・良政の存在の影響があったと考えられる。

また、何天炯や黄興、萱野長知などは宮崎滔天と関わりがあったことから、この部

分についていえば、純三郎が東京において彼ら革命家や日本人支援者と出会う機会がなかったとしても、辛亥革命勃発後に宮崎と行動をとる過程で、宮崎の人脈が純三郎につながっていく可能性もあったのではないかと推察される。

ところで、純三郎と孫文との関係が注目されるが、純三郎は1911年12月に香港で孫文に会ったのが3回目であったと回想している。1回目は1899年に良政と孫文が東京神田にある良政の仮寓で面会した際に、障子の穴から孫文を覗き見した時であり、2回目は1900年夏に上海で良政に正式に孫文を紹介された時である¹⁷。したがって、純三郎は1906年の帰国中には、同時期に日本に滞在していた孫文とは会っておらず、1911年12月に両者の関係が正式に始まったということが分かる。

おわりに

以上、山田純三郎が孫文支援者として登場する以前の状況についてまとめてきた。

純三郎は1911年12月に孫文支援者として革命の表舞台に突然登場した印象があるが、詳細にみると、同年11月の段階で陳其美にピストルを提供し、また革命を支援する宮崎滔天などと行動をとるという形で、辛亥革命に関与していたことが確認できる。しかし、この部分は従来あまり触れられてこなかった。それが、純三郎が突然登場した印象の理由の1つと位置付けられるが、このような看過されてきた部分も含めて、純三郎が中国の革命にどのように関わり、どのような行動をしたのか、そし

¹⁴ 同上、463頁。

¹⁵ 『革命評論』第9号(『明治社会主義資料集第8集 東京社会新聞 革命評論』労働運動史研究会編、明治文献資料刊行会、1962年)。

¹⁶ 『宮崎滔天全集』第2巻(宮崎龍介・小野川秀美編、平凡社、1971年)557頁。

¹⁷ 前掲「革命夜話」。

てその過程でどのような革命人脈が築かれていったのかという点について、さらに全体像を明らかにしていく必要がある。

また、純三郎の革命人脈について考える上でのキーパーソンとして宮崎滔天に着目し、純三郎との関係を検討した。両者は辛亥革命以前にすでに接点があった様子を浮き彫りにしたほか、革命後に宮崎滔天の人脈が純三郎にも関係していった可能性を指摘した。一方で、革命以前の宮崎と純三郎の具体的な関係について追究することは今後の課題である。

さて、純三郎がピストルを提供した陳其美であるが、彼も1906年夏から1908年春まで東京に留学していた¹⁸。だが、留学中の陳其美と宮崎滔天は接点が皆無に等しかったため¹⁹、純三郎は陳其美との関係を独自に築いていたことになる。それが東京であるのか上海であるのかは定かではないが、純三郎が独自に築いた革命家たちとの人脈の全体像を解明するとともに、そうした人脈が純三郎の革命における行動にどのようにつながっていったのか、という部分について研究を深めることも、今後の課題として挙げられる。

¹⁸ 陳其美の日本留学期間および留学中の動向については、前掲『陳其美伝』11～19頁を参照。

¹⁹ 前掲『宮崎滔天全集』第2巻、634頁。